

僻案抄古筆切管見

―伝阿仏尼筆鯉切―

日比野 浩 信

藤原定家が三代集の歌に施注した僻案抄の伝本は、大きく甲・乙に二分類して、それぞれを「初稿本」「再稿本」とする説、初稿本を「一類本」、再稿本を「二類本」とし、そこに含まれないものを「三類本」として三分類する説、一類本のうちの一部の伝本を「草稿本」として分離することで全体を四分類する説などが提示されている。それぞれの分類間の関連性についても、主に一類本を先行するものと考えられる旧來說に対して、二類本から一類本と三類本が派生したとする考え方も示され、その生成過程は複雑な様相を呈しているが、これらを俯瞰したうえで有効な伝本の影印も提供^{〔1〕}されている。また、僻案抄の古筆切についても、海野圭介氏による収集・整理があり、ここでは、

a 伝阿仏尼筆鯉切（四葉）

b 伝二条為道筆六半切（六葉）

c 伝藤原定家筆六半切（二葉）

d 筆者未詳六半切（一葉）

e 伝頓阿筆四半切（一葉）

f 伝兼好筆四半切（一葉）

g 伝寿暁筆四半切（一葉）

h 伝小倉実教筆四半切（一葉）

i 伝相良為統筆四半切（一葉）

の八種十八葉が紹介²⁾されている。

僻案抄の伝本・本文について、稿者に特に異見や新知見があるわけではないが、海野氏のご報告以降に、管見に入った僻案抄の古筆切が複数ある。それらの紹介も兼ねて、若干の検討を加えることで、今後の再検討に資することとしたい。ただし、同じ僻案抄の断簡としては、まとめて一括提示しておくことが望ましいが、紙幅の都合もあり、今回はまず、a 伝阿仏尼筆鯉切について述べることにする。

なお、模写切なども、「転写本」と考えて積極的に利用することとし、新出の断簡には、同種の断簡の合計枚数を示すために、海野氏紹介の断簡番号に続く番号を付した。また、本文の比較には、主として日本歌学大系所収本（志香須賀本と呼称。以下同）を用いたが、他にも一類本は国立歴史民俗博物館蔵高松宮旧蔵本（歴博本）・天理大学図書館蔵藤原為家筆本（天理本）、二類本は宮内庁書陵部蔵鷹司家旧蔵本（書陵部本）・國學院大學付属図書館蔵伝二条為重筆本（國學院本）・刊年不明版本（版本）・群書類従本（類従本）、三類本は斯道文庫蔵為兼奥書本（斯道文庫本）、京都大学付属図書館蔵中院文庫長享元年仙源筆本（京大本）をも参照した。

なお、各断簡の本文掲出に際して、（ ）内に施注歌の集名と歌番号を示し、断簡の大きさについては基本的に、後掲図版のキャプションに（縦センチ×横センチ）として、その数値のみ記載することとした。

a 伝阿仏尼筆 鯉切

新撰古筆名葉集^①の阿仏尼の項の筆頭に「鯉切 四半古今注 哥二行書 白或ハウス茶地 鯉又ハ家形等ノキラ画アリ」という記述があり、文化版の古筆名葉集では「鯉之下絵 四半切」、古筆切目安では「鯉之下絵 四半切 僻案抄」、類葉集には「鯉之下絵 四半 僻案抄 九行十行」とある。鎌倉中期頃の書写で、もとは四半形の冊子本。一面の行数は、類葉集に「九行十行」とされているが、これまでに管見に触れた鯉切は、『古筆学大成』所収切のうちの二葉(図196)が九行、あとは新出切と模写切を含めて十行である。この図196は、模写断簡7(後掲)の直前に当たるが、二葉の間に「この哥かすさへかけさへ昔より(書陵部本)」という本文が欠けている。模写断簡7は一面完存の十行であることから、直前の図196の左端一行が切断された上での九行残存であることが明白である。よって、当該鯉切の一面当たりの行数は現時点では全て十行と考えてよからう。

また、鯉以外の紋様もあり、藻塩草所収切では家屋の紋様が刷り出されており、その附属目録には「秋田切 鯉ノ下絵 トモ云」とあり、やはり鯉の紋様を含む、同じく伝阿仏尼筆の古今集切が存しているなど、切名と書写内容に関しては、^⑤解釈の分かれるところである。稿者も思うところはありますが、全て割愛し、ここでは、料紙の紋様に関わらず、伝阿仏尼筆(冷泉為相とする異伝も存する)僻案抄切を「鯉切」として取り上げることとする。海野氏によって四葉が紹介され、二類本相当の本文であることが指摘されているが、その後、模写切を含めて五葉の鯉切が管見に触れた。まずは、本文を掲出ししておく。

5 「北条時宗とその時代展」図録所収切(古今集九八・一一一・一二六)

つねならばとてこそ心もあらはに

きこえめ

こまなへていさみにゆかむふるさとは
ゆきとのみこそはなはちるらめ

こまなへてはならへて也うちつれたる

よしなりなめてともかくおなし事也

おもふとちはるの山辺にうちむれて

そこともいはぬたひねしてしか

おもふとちとはおもふ人とちひきて

くしてそことさしてもゆかぬ春の山に

6 個人蔵切（古今集一五二・一六〇・一六三）

やよやまてとはやしはしまてといふ心也

ほと、きすはしてのたをさといふとり

なれはこの世に我すみわひぬ我をと

くさそへといふよしのことつてなり

さみたれのそらもと、ろにほと、きす

なにをうしとかよた、なくらん

と、ろとはよるもしつまらすさは

きなくといふこ、ろ也

むかしへやいまもこひしきほど、きす

ふるさとしもなきてきつらむ

7 個人蔵模写切（古今集一九一・二〇八）

両説といふ明月いたれる時ものかけ
なきを本意とすはるかにとふかりの
かすさへたしかに見えむこそ月の
あかき心になふへければ両説あり
ともかすさへを可用

わか門にいなおほせとりのなくなへに
けさふくかせにかりはきにけり

此鳥さまくゝに清輔朝臣等の人々説々
をかきて事きらさるへし

この哥かりはきにけりといふに鷹と

8 個人蔵切（古今集二〇八）

いふ説はあるへからす時の景氣

あきかせ

○す、しくなりゆくころにはた、き

なれきたりておとろへゆく秋草

の中におりゐて色もこゑもめつ

らしきころはつかりそらにきこゆる
当時ある事なれはつねの人の門
庭などになれこぬ鳥をとをくもとめ
いたさてめのまへにみゆる事につく
へしと思給は也いはまは○しからむ人は
鳳とも鸞とも心にまかせていひなす

9 個人蔵切（古今集二〇八）

いひい○たすをかしく○きこゆこの事き、
てのち安芸国にかよふ人にとへはみな
おなしさまにきゝたるよしを申也
大和河内などにもあまねく申よし
をきこゆひとへにをしていはんより
は国々の土民の説もちるへくや
あきはきにうらひれをれはあしひきの
山したとよみしかのなくらん
うらひれ□らふれといふ事はもの
おもひうれへたる心也しなへうらふ

断簡5は、「北条時宗とその時代展」の図録に「秋田切」として掲載される個人蔵切。図版を見るに、稿者などは蠟箋、あるいは焼絵かなどと思つてしまふ。そんな料紙であるが、解説によると、「鯉切とも称される古筆切で、赤雲母で梅枝が摺り出されている料紙に藤原定家の「僻案抄」が書かれている。(中略)控えめな料紙は鎌倉後期の特色をよく示しているもの。」とある。三行目「なへ(上・下二)・七行目「とち(上二・下)」に朱の声点を付す。

八行目一二六番歌の第四句を「そこともいはぬ」としているが、古今集では、

「しらぬ」私稿本・亀山切・基俊本・筋切・元永本

「いはぬ」雅俗山莊本・永治本・前田本・天理本・伝寂連筆本・雅経本・永曆本・昭和切・建久本・寂惠本・伊達本

「しらぬ」静嘉堂本・六条家本

のようにある。僻案抄の一類本は「しらぬ」とするが、同じ一類本中でも歴博本では断簡同様「いはぬ」とあり、二類本・三類本に「いはぬ」とあるなど、各分類による違いとは断じがたい。定家の著述としても、定家本古今集の本文としても「いはぬ」のほうを認めるべきであり、むしろ「しらぬ」とするもののほうを、何らかの本文との接触によって異同を生じた⁽⁷⁾と考えるのが穩当であろうか。

また、七行目、断簡と一類本では「なめてともかくおなし事也」とあるが、二類本・三類本では「おなし事也」を欠く。他の箇所も異同から鯉切は、概ね二類本としての傾向が認められるのであるが、このような現象がある以上は、現存伝本による比較だけでは図ることの出来ない本文の在り方をも想定せねばならないかも知れない。

断簡6は、個人蔵の断簡。雲母で紋様が刷り出されているものの、薄く疎らで、その意匠は判然とししない。五行目「と、ろ(下・上二・上)」、九行目「へや(下二・上)」に朱の声点を付す。

七行目に「と、ろとはよるもしつまらず」とあるが、参照した現存本では、「と、ろとはそらもうこくやうにといふ也よた、とはよるもしつまらず(天理本)」のようにある。当該断簡での「と、ろとは」と「よた、とは」の、「とは」の目移りに

よる波線部の誤脱であろう。

断簡7は、個人蔵の模写切で、志香須賀文庫旧蔵模写切二十六葉⁽⁸⁾のうち。他の鯉切僻案抄と比べると、行が斜めに歪み、文字も字形が乱れてたどどしいが、臨模故、致し方あるまい。薄様の鳥の子紙に「為相卿古今集抄物切」として、一分十行が模写されている。次丁に当たる断簡8に過不足無く連続し、改行・行詰にも特に作為的な不自然さは感じられないところから、いずれかから本文のみを参照して作成された贋物などではなく、確かに存在した断簡を臨写したものであろう。いわば「忠実な転写本」であり、その本文は、鯉切の当該箇所が出現するまでの「繋ぎ」としての役割は果たし得よう。また、当該模写切が一分十行を完存していることで、直前に位置する既紹介の一葉に、一行分の裁断を認め得たことの意味は、先述のとおりである。

一行目「両説といふ」が、二類本に一致するが、一類本では「両説又二首歌⁽⁹⁾などいふ」する中で、同じ一類本の歴博本は波線部を傍書とする。また、四行目「あかき」が二類本と一致し、一類本は「くまなき」とする中で、歴博本は「あか」を見せ消す、「くまな」と傍書する。これらの異同は、二類本を基とした傍書や書き入れが、一類本に反映されるという本文の生成の過程を示していることになろうか。

十行目も、「この哥⁽¹⁰⁾かりはきにけりといふに鴈⁽¹¹⁾と」の「哥」が一類本には無い。二類本・三類本には概ねあるが、二類本のうち、定家自筆本の様相を伝えて最重要視される書陵部本では傍書となっている。また、「鴈と」が二類本では断簡と同様にあり、一類本では「此鳥雁と」のようにあるが、一類本のうち、やはり定家自筆本の面影を伝えると推測される歴博本では「鴈」の前に補入記号を付して「この鳥」を傍書する。断簡本文の傾向としては、確かに二類本に近いが、必ずしも合致しているわけではない。なお、二類本から一類本・三類本へ分岐していったかのように見られる例もあり、取り分け傍書の付加とその本文化、特に一類本の歴博本・二類本の書陵部本に見られる書入れや傍書と、その本文化については、僻案抄本文の生成過程の一様相として興味深いといえよう。

五行目、他本では「を用」とするところを「を用」としているのは、独自異文といえようが、大きく問題とする必要はなからう。

ともあれ、模写切とはいえず、看過できない異同を含む「鯉切」の本文を伝えるものとして、現時点では、オリジナルの代用としての資料的価値を持つことは認められよう。

断簡8は、模写断簡7に接続する一葉。雲母で家屋と庭園らしき紋様が刷り出されているが、雲が立ちこめており、仙家であろうか。二行目「す、しく」の前に挿入記号を付して「あきかせ」と傍書、九行目「まし」の間に、やはり挿入記号を付して「ほ」を補うが、これは、誤脱に気付いての挿入であろう。ただ、九・十行目が大きく異なっている。

断簡	一類本	二類本
<p>・・・思給也いはま<small>は</small>しからむ人は鳳とも鸞とも心にまかせていひなす</p>	<p>・・・思給也 後年二追注付 ある好士…… (天理本)</p>	<p>……思給也いはまほしからむ人は鳳とも鸞とも心にまかせていひなすへしたかひにしるへからす 近年ある好士…… (書陵部本)</p>

断簡が、従来の指摘通り二類本（三類本も同様にある）に相当する本文であることは瞭然である。ただ、一類本の中でも歴博本は、「思給也」と「後年追注付」の間に、大きく鍵点を付して「いはむとおもはむ人は心にかまかせていひなすへしたかひにしるへからす」という本文が付加されている。「鳳とも鸞とも」が無いなどの相違はあるが、二類本・三類本とほぼ同様の本文であり、同系統内における変遷と、他系統への分化に関わる本文を示す箇所といえよう。

断簡9は、一見、蠟箋あるいは焼絵と判断されそうな料紙で、水上の波と枝垂花が刷り出されている。実際、当該断簡

を掲載する古書店目録では、「蠟箋料紙」と記載している。しかし、子細に観察するに、刷り出された紋様の線上に雲母が残存しており、光の当たり具合によつては、雲母の輝きが確認できる。断簡5の解説がいう「赤雲母」はこのようなものをいうのであろうか。あるいは接着（定着）剤や雲母に含まれる成分が「ヤケ」をおこすなどすることで、いわゆる「焼絵」のようにみえるのであろうか。美術・工芸サイトからの検討、ご教示を賜りたい。

先の断簡7・8と同じく古今集二〇八番歌の注釈箇所であるが、断簡8との間には隔絶がある。料紙を観察するに、断簡8とこの断簡9は、双方料紙右下に手擦れによる黒ずみがあり、共に一面分の十行が残る丁の裏、すなわち右側の頁であったことが判る。つまり断簡8と9の間には、両面書写された綴葉装の、丁の表にあたる一面が存したことが推断できる。両面書写の相剥ぎされた一面分であるので、確かに存在したはずであり、今後の出現が望まれる。なお、七行目「うらひれをれ（下・下・上・下・上・下）」に朱の声点を付す。系統に関わる異同として、四く六行目を比較しておこう。

断簡	一類本	二類本
<p>大和河内などにもあまねく申よし をきこゆひとへにをしていはんよ りは国々の土民の説もちあるへく や</p>	<p>一州一村にも当時かく申さんにと りてはひとへにをしていはむより はもちあるへし但可随人々所好 (天理本)</p>	<p>大和河内などにもあまねく申 よしきこゆひとへにをしてい はむよりは国々土民の説もちある へくや人の心にしたかふへし (國學院本)</p>

二類本（三類本も同じ）に相当する本文であることが明白である。なお、二類本の書陵部本では、「大和河内などにもあまねく申よしキコユ」を傍書、一類本の歴博本では「一州一村にも当時かく／申さんにとりては」が行の左右に傍書され

ている。また、「国々土民の説」は、二類本でも書陵部本では傍書とする。掲出箇所末尾、「……もちゐるべくや」に続けて二類本では「人の心にしたかふへし」が加わるが、一類本では「もちゐるべし但可随人々所好」のように続く。ただ、一類本中でも歴博本は「……もちゐへくや人の心にしたかふへし」としながら、傍線部を見せ消しにして「但可随人々所好」を傍書する。これに該当する本文が断簡にないのは、単なる誤脱なのか、本文の性質に由来するものなのか、俄に判断はできない。

以上、模写切を含めた新出の鯉切五葉について通覧した。本文の生成や系統の分岐、同系統間での変遷を示唆する重要な箇所の断簡が見出されている。当該鯉切が二類本としての傾向を持ち合わせた本文を有していることは認められようが、本文の異同からは、必ずしも明確に分類できていると言ひ難い所もあり、特に定家自筆本の様態を留めると思ひき一類本の歴博本、二類本の書陵部本に見られる傍書や書入れを考慮するに、再検討の余地はありそうである。

僻案抄は、他の歌学書に比べても多くの伝本の翻刻・影印もなされ、少なからぬ古筆切の存在も確認できるからこそ、これら恵まれた資料群を元に、古筆切をも加味した伝本・本文の再検討が望まれる。本稿も資料として供するところがあらずである。

また、古筆切の価値は国文学研究の資料的価値だけではない。特に鯉切の料紙、乃ち紋様の絵柄や、加工方法などについての、美術・工芸研究の立場からのアプローチにも期待したい。

なお、鯉切以外の僻案抄切については、別稿に述べることにする。

注

- (1) 古今集注釈書影印叢刊1『僻案抄』(平成二十年 勉誠出版)の佐々木孝浩氏の解題「二『僻案抄』の系統分類研究史」に要を得てまとめられており、影印・翻刻についても「三『僻案抄』の伝本と影印・翻刻」に一覧されている。
 - (2) 海野圭介氏『僻案抄』古筆資料の検討」(『古代中世文学研究論集 第三集』平成十三年 和泉書院)。
 - (3) 注(1) 参照。
 - (4) 以下、古筆名葉集の類は伊井春樹氏編『新版古筆名葉集』(昭和六十三年 和泉書院)に拠るが、同書に収録のない類葉集は個人蔵写本に拠る。
 - (5) 草花を刷り出した見ぬ世の友所収伝阿伝尼筆古今集切に附属する極札には、「鯉下絵」を墨線で消して「秋田切」と記されている。また、『古筆学大成』では、「鯉魚の図様」の伝後京極良経筆新撰朗詠集切に対して「鯉切本新撰朗詠集」の名称を与えている。
 - (6) 「北条時宗とその時代展」(平成十三年)。大きさは「縦二三・六 横一五・四」とある。
 - (7) 久曾神昇氏『古今和歌集成立論 資料編』(昭和三十五年 風間書房)
 - (8) 久曾神氏のメモによれば、元来二十七葉で、伝小野道風筆小島切が失われているが、他に伝定家筆唯心房集六半切・伝源俊頼筆京極関白集切・伝寂蓮筆法門百首切などの模写が残存する。これらのうち藤原俊成筆了佐切・伝藤原定実筆(佐理卿とする)筆筋切と、伝西行法師筆白河切後撰集(甲・乙とする二葉)・伝二条俊忠筆金葉集切が、「模写が精確ではない」とされながらも、「加茂季鷹臨写」として既に紹介されている。詳細は別機に譲りたい。
- なお、一連の模写切の中には、四隅に「のような印を付して原断簡の大きさを示すものもあるが、当該「為相卿古今集勘物切」には無い。ただし、字高は、歌二十センチ内外、釈文十八センチ内外の他の鯉切とはほぼ合致している。

やうやうとたやうりまやといふ
ほろきはたてのたをといふなり
ふれはこたに種すんりぬ我をよ
くさうへといふるのよあてなを
こんれ乃ろしとるるよかたます
ふふうしとらよふるん
ごんふらうし一はますさは
まふくといふる也
じしやいしとふしきかたまん
ゆるとといふるまふたまつじ

為相卿古今集抄切

夏後といふ明月いづれは時々のま
 なまを本意とすりまるともふりま
 かす人きりた見えんを月乃
 あまきんよのたうくを秋の夏後あは
 せしつゝまへとす用
 わの門はいなれたほをわれあぐらんよ
 けいこくをたかきいまたくわ
 此書にほくは清輔卿未乃人の後
 をよきとてまきしりて
 二乃年かりのまよるをいふは鷹と

いふ説をあへてしむる時の景と氣
あきる
すくなくたむゆくくふふふふふ
なれまきききききききききき
の中まはる井千色もくふふふ
らききききききききききき
富時あるまはるまはるまはる人の門
庭ちちちちちちちちちちちちち
いふふふふふふふふふふふふ
アとととととととととととととと
鳳とととととととととととととと

いふすなりきりるゝをまは
てのら安忍國かゝり人よとて
行ふしとてまきとたらむを
大和河内をたもあはれ
をまらかりんよをてい
八國の玉氏の読もらみらるや
あきいりうよういさをれい
山しんをえんしつる
ういれまはれい
行んうたへる心

いづれすをうきくもいふをまは
てのち安ん國かよふ人よと人のま
にむしよはむまきこたるといふを
大和河内をたしあふれく
をまきこたるといふを
八國の五氏の説しむるは
あまのこころをいふを
いふをいふをいふを
いふをいふをいふを
いふをいふをいふを

